まい　あーと■油絵「スペインの村」by 原田 成大

ヨーロッパの風味をたたえた菓子舗といえば、一番に北口の「エミリーフローゲ」が挙げられてきたが、開店以来ゆるがぬ味を創り上げてきたのがシェフの藤生義治さん。東京製菓学校を卒業後に、実地で３年基礎を積み、パリ３年、ウイーン１年の修業で腕に磨きをかけ、「エミリーフローゲ」を開店と同時に手掛けてきた。素材から授かるイメージを常に大切にしてきたという。才能、経験、さらには他分野から得たイメージも大切にしている。今回のLe Champ de Fruits（フルーツ畑）にも、オーソドックスなデザート菓子に藤生さん独特の美観が盛り込まれている。ヨーグルトのムース、パッションフルーツのムースにキウイやカシス、特に中央の飴細工「薔薇」が鮮やか。

撮影：板橋一明

藤生義治のLe Champ de Fruits（フルーツ畑）

（ル シャン ドゥ フリュイ）

えくてびあんレポート

春、躍る。

柴崎体育館が落成した1月27日、立川に東風が吹いた。
春の服を着た人々の色とりどりの靴が、セレモニーの中でステップを刻む。フロアーに躍る靴の群れは、咲き狂うことが春と言いきるかのよう。体育館を待ちわびた人々のこころは、春の光に弾み、春の風に躍る。今年の立川の春は、柴崎体育館から湧き上がった。

オープニングセレモニー感激の瞬間

会場で祝辞を述べる立川市長

最新設備のトレーニング室

一年中泳げる温水プール

自然光が充分に差し込み開放感が味わえる

立川市ダンス連盟による模範演技の数々

東京体育大学による新体操模範演技

バルセロナ五輪選手 川本ゆかりさん（[illegible]）の演技光る

立川トピックス

星降る夜の演劇祭

多摩地区のアマチュア劇団が勢ぞろいしてのステージ、『星降る夜の演劇祭』が、2月2日から13日、約10日間にわたり、市民会館にて、(財)立川市地域文化振興財団の主催で繰り広げられた。昨年の「真夏の夜の演劇祭」に続いてのもので、6日(土)には、前売りチケットが売り切れるほどの盛況。市民劇団5つ、音楽朗読劇団2つ、専門劇団2つの計、9劇団が星降る夜を熱くした。13日には表彰式が行われ、優秀賞に『表現考房ぐう』、努力賞に『劇団ホワイトペーパーカンパニー』、そして、パフォーマンス賞に『おんろう'92』と、富塚研二ソロ・パフォーマンス、入った。

盛大に福はうち

2月3日(水)節分祭で、砂川の阿豆佐味天神社では、今年の年男たちが、代表で揃い、威勢よく豆が蒔かれた。午後1時から5回にわたり行われ、近所からも、子供たちが集まり、鬼はそと、福はうちと投げる豆を、手をいっぱいに広げて、拾うのに夢中の一時を過ごした。砂川開発の際、村の鎮守として、親村である殿ヶ谷戸の延喜式内阿豆佐味天神社から分社された、この阿豆佐味天神社。ご祭神は、医薬の神として、名高い少彦命名と天児屋根命。立川市の重宝指定も受け、砂川全域の総鎮守として、尊宗を受けてきた。

真如苑だより

春はたくさんのドラマを運んできてくれます。あの凍てつくような空気が緩んでくるだけでもドラマチックなのに、受験という人生の関門をくぐる子供たち。合格の自分の名前を見付けた時の、あの歓喜は例えようのないもの。

そして、もうじき、世界に冠たる「さくら」が咲き誇ります。

立川のドラマチックな春がはじまろうとしています。今月の真如苑へお出掛けください。

■日時　3月15日(月)　2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

ハーイ！ハーイ！ハーイ！学級新聞作りたい人ハーイ！ハーイ！ハーイ！

▲学級新聞、日本一と言われる朝日小学生新聞賞に輝いた

学級新聞つくらせれば、日本一、▶三小、牧野吉剛教諭

今どきの子供たちは、昔の子供たちと比べて、瞳に光沢の色がないと言う大人がいます。小さな事件にも、当り前でしょ？という返事が、子供の方から返ってきてしまうと、親の方が、がっかりしてしまうからでしょうか？こんな皮肉めいた傾向を嬉しいくらい、元気よく裏切っていく子供たちは学級新聞が好きだった。

●先生、新聞作りたいんです。

9年前、赴任したばかりの、牧野吉剛先生（現、三小教諭）が受け持った6年生では、学年4クラスのうち、3クラスが、学級新聞を作っていた。隣もその隣も、楽しそうにやっていれば、自分たちもやりたくなる。「うちの先生、新しいから、わかんないんだよ。先生をけしかけよう」「うちも、学級新聞作ろうよ。そうか、じゃあ、学級新聞、作りたい人、ハアーイ。じゃあ、先生も作り方、よくわからないけど、一緒にやってみよう。」その時、一人の生徒が言った。先生、簡単だよ。真似すればいいんだよ。

●先生、新聞用紙ちょうだい

国語で作文の時間と聞くと、頭を抱えてうわあ〜と、言う生徒も新聞用紙は喜んで取りにくると。はじめ、何を書くか、わからなくても、いつ、どこで、それは誰が、と、聞くうちに、記事が書けてきて、それが、慣れてくると、結構上手になってくるようだ。

●僕、まだ誰もやっていないことを今度書くからね

A君は、かねてから、先生、僕まだ、誰もやっていないことをやるからね、と、言っていた。ついに、自分の担当の番になると、いびつの楕円ではあったが、今までにない面白いデザイン記事ができてきた。それは、トップの報告記事で、記事の真ん中に記事中の本人の似顔絵を描き、それを丸で囲むことだった。

●先生、これ書けるね。

新聞が始まって、いつもアンテナ感覚がついてきたようだと先生は言う。ふと、小さなことでも、いいことがあると、生徒の方から言ってくる。先生、これ書けるねと。

●流した涙は忘れるな

先生が、朝学校に行くと、その女の子は、先生、ちょっと聴いてくれと、泣きながら訴えてきた。自分がいじめられているというのだ。よし、わかった、先生に任せろ。それだけ、言うと、先生は教室に戻って、黒板に次のような詩を即興で書き始めた。

一人の少女が泣いた。
悔しくて泣いた。
ほおに流れる涙をぬぐいもしないで
私のどこが、いけないの
悔しくて泣いた。
ほおに流れる涙をぬぐいもしないで
私のどこが、いけないの
教えてほしい……

その時の話合いの様子も新聞に書かれている。新聞をしていると、そんなことまで話ができるのかもしれない。先日、もう高校2年生になっている。この女の子から手紙が先生のところにきた。その時の新聞の感動が、あの時のままで

て　村から出てきたと

ことわざ問答㊱

漢字一字挿入せよ

陰徳あれば□報あり

□を貸して母屋取られる

卒業・入学の上手な記念写真の撮り方教室です

私の空想ゲーム

きど のりこ（童話作家）

私が立川の一隅で童話を書きはじめてから多くの歳月が流れました。

いつもいつも、「金魚が電車にのってきたらどうだろう」とか「ベランダにキリンがいたらどうなるだろう」といったことばかり考えてきたような気がします。大人の内部にも入れ子になった箱の小さい部分のように、または木の年輪の中心のように〈子ども〉があると私は信じていますが、もしかすると私はその中心部分が肥大しているのかもしれません。いつもの生活の中の私は、それなりに分別のある中年の大人で、したり顔をしてスーパーでキャベツを選んだりしていますが、夕暮れに見知らぬ街角に立ったり、思いもよらない出来事に遭遇したりすると、子どもの頃そのままのような悲しみと混乱が、私を襲ってくるのです。ついこの間も八高線の駅で、拝島方面の電車にのるべきところを川越行きにのってしまいましたが、それに気づいた時の私の幼児のような狼狽ぶりは、あとでおかしくなるほどでした。

しかし、と私は考えます。

子どもというものは、ただ分別がない、未発達な、大人の前段階にすぎないのだろうかと。そうではなく、まだこの世に慣れず、この世に適応するためのインデックスのような知識を持たず、それ故に喜びも悲しみも恐れも大きい、〈若い人間〉ではないか、そう思うと、自分の中に〈若い人間〉がまだ入っているということが嬉しいような気持ちにもなってきます。そして自分がいつも途方もない夢や空想を追いかけていることについても、その〈若い人間〉がなせる業なのだから、いたしかたない、と思うようにもなりました。

さて、その私の空想癖から派生した能力（?）のひとつに、ひとりの人物をその生活史の全体から見るという遊びがあります。たとえばひとりの年輩の女性がいるとすると、その人が若い女性だったころ、少女だったころを想像してみます。人間というものは、昆虫ほどではないにしても、かなり外側のメタモルフォーゼが激しいので、それは困難な作業ではありますが、はじめに述べたように、構造が必ず「入れ子式」になっていますので、慣れると面白いように〈見えて〉くるものです。もし私に恋人がいたとすると、その人を幼い時代に戻し、抱っこして自転車の前にのせて遊園地へ連れていくこともできます。これはほとんどゲーム感覚で、実際にその人の子どもの頃の写真などがあると、もっとやりやすくなります。そういえば私は、昔から、〈有名人〉の子どもの頃の写真を見るのが好きでした。かれらはそのアルバムの中で、無邪気な瞳を見ひらき、やがてくる激動の人生やひどいスキャンダル、非業の死などにむかってにっこり微笑んでいるのです。

こんな見方をすると、まったく〈因業じじい〉としか呼べないような人物も、世間から〈犯罪者〉と呼ばれている人びとも、金権亡者のような人でさえも、別の一面をあらわしますから不思議です。またすでに世を去った肉親などもその折り折りの姿で私を楽しませてくれます。また、これを現在子どもである人びとに通用すると、かれらが未来にどんな大人になるかがうっすら見えてきて、これも面白いものです。

このめっぽう楽しいゲームが病みつきになったまま歳を重ねていくと、いつか私は過去、現在、未来の区別、生者と死者の区別もいっさいつかない混沌の中に入っていくのではないかとも思われますが、それはそれで至福の時でもありましょう。

つい昨日のことですが、電車で隣りあわせになった七〇代の男性が、文庫版の童話全集を読んでおられました。（一瞥で隣りの人が読む本の内容がわかるのも私の特技）やがて降りていった銀髪のその方の後ろ姿に、私は永遠の少年を見たのでした。

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

表紙は語る

まい・あーと 油絵『スペインの村』by 原田成大

「1973年65歳の時、妻と一緒にスペインに移住、以後20年、家族や友人などが、帰って来いと、言ってましたが、4年前に妻を亡くして以来、自炊生活をしながら、南スペインの田舎に住んでいます」と語りはじめた原田成大さん。先日、アートサロン四季（曙町）で開かれた個展からの作品です。「風景が色を教えてくれる」と原田さんは、言います。それは、生物画でも、描いている時に、色がわからなくなると、外へ出て、風景を描く。すると、風景が色を教えてくれる。描いている風景画がおかしくなったら、今度は、がっちりとしたセザンヌみたいな妥協のない生物画を描くと。また、「よく考えてみると、日本の光には、スペインのあのギラギラするカドミュームイエローも、ねちねちとするクロームイエローもない。日本のは、レモンイエロー。そのために陰影の色をハッキリ掴めない」と20年の間、ギラギラする日の光の中で陰影の美を追求している原田さんは、更に深く入って、表現の究極である抽象の美を見ようとしている。

立川クイズ

3月3日は桃の節句ですが、昔の節句は、桃の咲く時期が4月で飾れなかったのです。雛人形も、「長く飾ると嫁入りが遅れる」などと聞きます。飾り付けや片付ける日に柴崎と砂川で多少の違いはあるものの、普通は「12日間飾って13日目にしまう」のだそうです。その昔、立川の初節句を迎えた家では、親戚中から人形が贈られて大変にぎやかだったとのこと。さて、いただいたお祝いのお返しとして、菱餅ともう一つあるものを配ったのですが、それは次のうちどれだったのでしょうか。

①白酒　②お赤飯　③はまぐり

【2月号の答】❶

三多摩地区の特産物である、うどやごぼう、蓮根などの煮物をおかずとした駅弁が、東京一となったのです。地味な存在である立川の駅弁ですが、多くの隠れファンがいて、お煮しめ弁当のラベルを血眼になって探しているとか。今は、多摩弁と名前を変えています。

東風

トンネルを抜けると、そこは雪国であった。市の地域文化財団のアウトドア活動の一環として「パウダースノーin六日町」へ連れていってもらった。そして、トンネルを抜けると、なのだが窓外一面の雪景色に思わず拍手がわいたのだった▼六日町の「雪まつり」に参加して「ほんやら洞」と呼ばれるカマクラの中で炭火で焼いた餅や八海山という銘酒を片手に地元の方々と語り合った夕べはちょっと忘れ難い。たまたま編集子が立ち寄ったほんやら洞には米国フロリダから来ていたご夫妻がいて、日本語混じりというか、米国語混じりというか、なごやかなひと時であった▼雪とくればスキーだが、協力委員の鈴木功さんのスラロームがゲレンデに冴えていた。功さんは昭和28年のバッジテストで一級をとったそうだ。板も単板から合板に代わろうとしていた頃だろう。材はヒッコリーを最上としていた。クルミ科の落葉高木で弾力に富む。止め具はカンダハーか、もっと豪快なのはバッケンと云って、スキーとスキー靴をベルトでがんじがらめに結わえてしまう、転倒したらスキーがおれるか足が折れるか、天に選んでもらうしかなかった。編集子もその頃を少しだけ垣間見たことがあるが、なるほど、目の前のスキー風景とは雲泥の開きがある。降る雪も、こころなしか近代的に見えた▼スキー穿く　あの子かわいや　えくてびあん

月刊えくてびあん　第104号
平成五年三月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五（28）〇〇八二
FAX　〇四二五（28）一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

（編集）鶴川 理　名尾居真　中村絵里　原田悦子　半沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　皷川一巳　本多 修

佐々木秀貴さん
（曙町2丁目）
愛機→キャノンF1
■記憶の扉
私の傑作選
NO.20
NICE SHOT!
誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。
武田和紀さん
（柴崎町2丁目）
愛機→キャノンF1
■春の雪